



2019年度国際学部 中国研究旅行報告書

2019年9月2日～9月12日

大連／長春／ハルビン／北京





CONTENTS

🥟 はじめに

🥟 日程

🥟 事後課題レポート

🥟 写真アルバム

🥟 おわりに



はじめに

私が中国研究旅行の引率をしたのは今回で3回目です。1回目は「神秘的な九寨溝および域内の少数民族の暮らしを体験」、2回目は「世界遺産——麗江とナシ族文化」と、どちらも楽しそうなテーマを選びましたが、今回は「日露戦争の激戦地及び中国東北地方（旧満州国）を訪問し、近代史における日本と中国の歴史的つながりを体験する」という深刻なテーマとなり、企画した当初から学生が集められるかなと、不安が多少ありました。

中国東北部出身の私は幼い頃から目にしていた満州国時代に残された旧跡や出来事をいつか学生にも知ってもらえばいいなどずっと思っていましたが、暗い話題ばかりなので、なかなか学生を向き合わせることができませんでした。しかし、2年前にあるセミ生は、終戦直前に満蒙開拓団員の親に連れられて満洲へ渡り、中国残留孤児となった祖母にインタビューをし、満州国に焦点を当ててその波乱万丈の人生を描いた卒論を提出しました。その卒論は涙が出るほど感動的なものでした。旧満州国を含め、日中近代の出来事をもっと学生たちに研究してもらわないといけないと思い、今回の研究旅行を企画した次第であります。

幸い、国際学部だけでなく、家政学部、文芸学部及び短大からも参加してくれた学生たちはみな、事前勉強会から日中近代史または中国文化について熱心に取り込んでくれた学生ばかりでした。

東京に帰ってから現地で撮った数多くの写真を整理すると、11日間の思い出が走馬灯のように駆けめぐります。旧満鉄の線路をたどり、新幹線で東北三省をめぐった旅は、沿線の大連・長春・哈爾浜で学生たちが近代史にかかわりの深い歴史跡を数多く目にしたことであれよかったです。私にとっては司馬竜太郎の『坂の上の雲』のあの「坂」を確認できたことが予想外の収穫でした。

また、私の母校である東北師範大学で現地の学生と直接交流会をしたときの写真も目に焼きついています。実はちょうど40年前の9月に私はこの大学に入学しました。その後、4年間教鞭をとったこともある懐かしい場所です。40年の月日を経て、今回かつての同級生に頼んで日中近代史について講義をしてもらったり、母校の学生たちと共に立生が直接交流を行うことができたことに胸いっぱいあります。

さらに、北京で世界文化遺産を廻り、3日間だけで万里の長城・故宮博物館・天壇公園・定陵など名勝地に訪れることがで感動の連続でしたね。こんなにきついスケジュールにもかかわらず、学生の皆さんが終始精力的に楽しく研修できたことは本当に素晴らしいと思います。

今回の旅は中国のことわざ「走馬観花」（馬上の花見）と言われたように大ざっぱに

物事の表面だけを見ることしかできませんが、この小冊子に綴られた皆さんのが最終レポートにところどころ自分の言葉で記された歴史観を読むことができて本当によかったです。今回の体験がこれから勉強や研究に役立つことができれば何より嬉しく思います。

今回の研究旅行には、準備段階から JTB の奈良京一郎さんに大変お世話になりました。助手の小林弥生さんも在学中、北京大学に短期留学した経験を活かし、いろいろと細かい仕事を適切に行っていただき、大変助かりました。この場をお借りしてご尽力いただいたいた関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

2019年10月3日

李 錚強

2019年度共立女子大学国際学部中国研究旅行

2019年8月23日付

日次	月 日 (曜)	地 名	交 通 機 関	現 地 時 間	スケジュール	食 事
1	9月2日 (月)	東京(成田) 大連	JL 827 専用車	07:30 09:30 11:45 12:45 13:20 14:05 14:40 15:20	成田空港第2ターミナル集合 午前、空路大連へ。着後、市内へ 大連空港に到着後、JTBガイド合流 専用車にて空港出発後、中山広場へ 中山広場と旧大和ホテル(下車) 旧満鉄本社(入場) 旧日本人街散策(下車)後、ホテルへ ホテル着後、チェックイン	昼:機内 夕:○
					(大連泊)	
2	9月3日 (火)	大連	専用車	09:00 10:30 11:30 12:40 13:10 14:30 15:10 16:30	朝食後、専用車にて旅順へ移動乃木將軍とステッセル 東鶴冠山[入場] 203高地[入場] 水師營会見所(入場) 各自昼食 旅順博物館[入場] 専用車にて大連市内ホテルへ ホテル着後、休憩	朝:○ 昼:× 夕:○ (大連海鮮料理)
			専用車	18:00 18:10 19:30	専用車にて夕食会場へ 夕食(大連海鮮料理) 夕食後、ホテルへ	
					(大連泊)	
3	9月4日 (水)	大蓮	専用車	終 日	大連経済開発区童牛嶺・開発区規画展覧館見学 (バスで片道約1時間) 終了後、大連市市内自主研修 (ホテルに戻ってホテルを起点として中心街散策)	朝:○ 昼:○ 夕:×
					(大連泊)	
4	9月5日 (木)	大連 大連北駅 ~ 長春西駅	専用車 G 7 2 3 専用車	09:00 10:20 12:00 12:30 14:13 17:38	ホテル周辺中心街散策 ベニス水城散策 旧ロシア人街散策 専用車にて大連北駅へ※① 大連北—長春西(高速鉄道:2等席) 到着後、専用車にて夕食会場へ 夕食(東北料理)後、ホテルへ、到着後チェックイン	朝:○ 昼:× 夕:○ (東北料理)
					(長春泊)	
5	9月6日 (金)	長春	専用車	09:00 09:20 09:50 11:40 12:00 13:30 15:20 15:50	朝食後、専用車にて旧関東軍司令部へ 旧関東軍司令部(下車) 偽皇宮(入場) 旧満鉄ビル(下車) 各自昼食 旧満鉄映画撮影所 偽滿州國務院などの旧官庁街散策(下車) ホテルへ	朝:○ 昼:× 夕:×
					(長春泊)	
6	9月7日 (土)	長春	専用車	終 日	東北師範大学人文学院見学(バス片道約40分) (当大学教授による特別講義) 人文学院国際学部の学生と交流(大学内で昼食) 終了後、長春市内へ (長春市博物館・長春市武術館・長春市都市発展展覽館見学)	朝:○ 昼:○ 夕:×
					(長春泊)	

※①学生1名様 JL827 にて大連空港着、ガイドが空港出迎え、専用車にて大連駅まで案内後合流の予定です。

日次	月 日 (曜)	地 名	交 通 機 関	現 地 時 間	スケジュール	食 事
7	9月8日 (日)	長 春 西 駅 ～ ハルビン西駅	専 用 車 G 7 7 1	0 7 : 4 5 1 0 : 1 3	朝食後、長春駅へ 長春西～ハルビン西(高速鉄道:2等席) 到着後、各自昼食	
				1 1 : 3 1		
				1 4 : 0 0	旧大和ホテル(下車)と旧花園小学校(下車)	朝:○ 昼:× 夕:○ (ロシア料理)
				1 5 : 3 0	斯大林公園と中央大街散策(下車) (欧風の建物が並ぶ市街地を見学)	
				1 6 : 3 0	ホテルにチェックイン後、休憩	
				1 8 : 0 0	夕食(ロシア料理)	
						(哈爾濱泊)
8	9月9日 (月)	ハ ル ビ ン 北 京	専 用 車 CA 1 6 4 0	0 5 : 4 5 0 8 : 3 0	朝食後、専用車にてハルビン空港へ ※②	
				1 0 : 3 5	北京空港到着	
				1 1 : 1 5	空港にてガイド出迎え市内へ	朝:○ 昼:× 夕:×
				1 2 : 3 0	王府井到着後、自由散策	
				1 5 : 3 0	王府井出発、前門へ	
				1 6 : 0 0	前門到着、前門大通り散策	
				1 8 : 3 0	前門を出発、ホテルへ	
				1 9 : 1 5	ホテルチェックイン	
						(北 京 泊)
9	9月10日 (火)	北 京	専 用 車	0 8 : 3 0 1 0 : 0 0 1 2 : 3 0 1 3 : 3 0 1 5 : 0 0 1 7 : 0 0	朝食後、ホテル出発 八達嶺到着、徒步にて見学 八達嶺にて各自昼食後、出発 定陵到着、見学 定陵出発 夕食会場到着(北京ダック)	
				1 8 : 1 5	レストランを出発、ホテルへ	朝:○ 昼:× 夕:○ (北京ダック)
				1 9 : 0 0	ホテル着	
						(北 京 泊)
10	9月11日 (水)	北 京	専 用 車	0 9 : 0 0 0 9 : 4 5 1 2 : 3 0 1 3 : 0 0 1 4 : 3 0 1 5 : 3 0 1 6 : 1 5	朝食後、ホテル出発 天安門広場、故宮博物院、景山公園見学 景山公園を出発 各自昼食 天壇公園到着、天壇公園見学 天壇公園を出発、ホテルへ ホテル到着	
						朝:○ 昼:× 夕:○
						(北 京 泊)
11	9月12日 (木)	北 京 東京(成田)	専 用 車 J L 8 6 0	0 7 : 3 0 1 0 : 4 5 1 5 : 3 0	朝食後、空港へ 日本航空にて帰国の途へ 到着後、流れ解散。お疲れ様でした。	朝:○ 昼:機内

予定航空会社:JL(日本航空)CA(中国国際航空) ●上記航空機は往復共に未手配です。状況によっては変更になる可能性もございます。

※②国内線預け荷物は20kg1個までとなりますのでご注意ください。

南満州鉄道と中国

18A104 甘糟里奈

1. はじめに

今回、11日間の「2019年度共立女子大学国際学部中国研究旅行」に参加し、その中でさまざまな経験をした。私は事前レポートにおいて「南満州鉄道」について調べ、発表をした。なぜ「南満州鉄道」を選んだのかというと、少し前に劇場版アニメーションの「はいからさんが通る」という作品を見たときに、主人公の紅緒がシベリア出兵後に行方不明となった許嫁の伊集院忍少尉を探すため「満州鉄道」に乗るシーンが描かれていたことを思い出し、興味を持ったためだ。

事後レポートでは、「南満州鉄道株式会社とは」、「大連に残る満州」、「中国列車の現在」の項目に分けて「南満州鉄道と中国」についてまとめていく。

2. 南満州鉄道株式会社とは

日本は日露講和条約により、日本はロシアから東清鉄道の支線のうち、長春から大連間の鉄道施設と経営権を譲り受け、国家の政策を支援するための半官半民(政府と民間とが共同で出資し、事業を経営すること)の会社として1906年に「南満州鉄道株式会社」(略して「満鉄」)を設立した。本社は初め東京に置かれ、のち大連に移された。第二次世界大戦前の日本では最大級の会社であった。

3. 大連に残る満州

・旧満鉄本社ビル



満鉄関連の建物は多くが修復されながら現在も使われており、満鉄の旧本社ビルは現在も中国鉄路局の大連支局として使用されている。日本語が流暢な職員さんに、「南満洲鉄道」についての歴史を旧満鉄

総裁室と満鉄資料館を見学しながら説明してもらった。室内の写真は、「今仕事をしているので静かに」ということで撮ることは出来なかった。しかし、旧満鉄本社ビルには歴史を感じられたものきれいな状態を保っており、資料館には多くの貴重な資料が現存していた。中国人の見学者も時たま訪れていた。

・旧大和ホテル



満鉄は中国東北部において鉄道経営を中心に、炭鉱開発、製鉄業、港湾、農林牧畜に加えて、ホテル、図書館、学校などの整備を行った。現在の大連の都市インフラの基盤を作る役割を担った会社である。旧大和ホテル（現大連賓館）もそのうちの一つだ。

周りから一際目を引く立派な建物で、こちらも旧満鉄本社同様、100年も前に建てられたとは思えないほど、綺麗な状態で保たれていた。建物に近づいて見てみると、手の込んだ美しい装飾があちこちに施されているのが良く分かった。



室内も外装から予想は出来ていたものの、自分が思っている以上に豪華な雰囲気で驚いた。クラシックなデザインが自分を別世界に連れて行ってくれた。

旧大和ホテルの目の前には、大連の中心である「中山広場」がある。公園の周りにはオフィス街も広

がっている。

ガイドさんの口から、茶色の建物は旧大連警察署、その右が旧朝鮮銀行大連支店（現中国銀行）、旧関東通信局（現大連市郵政局）、旧大連市役所（現中国工商銀行）、さらには旧東洋拓殖大連支店（現中国交通銀行）…というように旧満州国時代に使用された建物がそのまま使われているという話が次々と出てきて大変驚いた。ちなみに、公園には松の木が一面に植えられていたが日本で見る松と全く別の木のように見えた。おそらく近代的な建物が多かったせいだろうと思う。また、白ハトがとても多かつた。日本だとまれだが、どうやら中国ではごく普通の光景らしい。



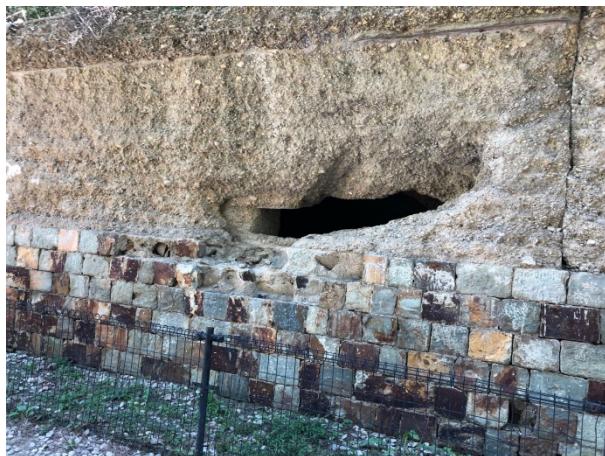
• 203 高地



日露戦争での旅順港を巡る攻防で日本とロシアが激突した場所である。そもそも「日露戦争」とは、朝鮮・満州の支配権をめぐり日本とロシアの間でおこなわれた戦争のことである。1904年に日本の旅順攻撃で始まり、翌年に日本は奉天を占領、日本海海戦でバルチック艦隊を破ったことにより軍事上の勝

敗はほぼ決定した。激戦地「203高地」はロシア軍艦が停泊する旅順港まで約4kmの距離である。港を見下ろせることからロシア軍が防備を固め、対して日本軍は大砲で軍艦を攻撃した。

ゲートを入りすぐの場所で、専用車を利用して203高地中腹の駐車場まで行くことが出来た。激戦地だったと聞いて身構えていたが、駐車場までの道にはかわいいイラストなどがデザインされていて、とてもそんなことがあったとは想像ができない、なんだか不思議な感じがした。



しかし、徐々に登っていくと痛々しい跡が見えてきた。日軍爆破口には、砲弾が当たった場所がそのままの状態であちこちに残っており、過酷な戦場の様子を思い浮かべさせられた。兵舎はドーム状になっているもののとても狭く、良い環境ではなかったことが窺えた。



大砲もあちこちに設置されていた。レプリカではあるものの、当時の様子が伝わってきた。

大砲の向いている先に旅順の街が見渡せる場所があった。街が一望できるため、確かにここは陣地を置くのにはいい場所なのかもしれないと思った。ここから砲弾があんなに遠くまで飛ぶのだと思うと恐ろしくなったし、辺りにある大砲の数からも、かなりの数が撃ち込まれたことが予測できた。

5. 中国列車の現在

満鉄が運行した列車の中では、蒸気機関車「あじあ号」が有名だ。特急「あじあ」は1934年11月、大連 - 新京間の満鉄最初の蒸気機関車だ。最高速度は130km/h、表定速度は82.5km/hで、日本国鉄の特急「つばめ」の平均速度66.8km/hを上回り、当時の日本の技術で最高水準の高速列車だった。遼寧省瀋陽市の瀋陽鉄路陳列館で2019年5月初めから一般公開された。



今回の研修旅行で、「大連—長春」、「長春—ハルビン」に向かう際に高速鉄道を利用した。



見た目は新幹線のようなフォルムで、滑るようにホームに入ってきた。



スピードは速いと聞いていたが、体感的には日本の電車と変わりないように感じた。また、揺れなども特に感じず、終始静かな電車の旅が楽しめた。車内販売もあり、飲み物やお菓子などが売られていた。

6.まとめ

「満州」と聞くと歴史背景から薄暗い暗い気持ちになる。そのため、これまで自分から調べることは無かった。しかし、今回研修旅行に参加したことによってイメージが変わった。中国を訪れると、旧満鉄本社のように日本人のつくった建物が中国各地に残っており、現在も使われていることを知った。その数はここでは取り上げきれないほどの多さで、日本と中国との接点は自分が思う以上に深いものだと感じることができた。また研修旅行中、現地のほとんどの人が温かく、そして丁寧に対応してくれた。メディアでは何かと国同士の関係が取り上げられるが、やはり自分の目で確かめない限りはこのような事実は分からないと実感できた。

戦争やそれ関連の出来事において、誰がいい悪いというのではないと思う。ただ、現場を見ることにより、何があっても戦争はいけないことだと改めて思った。例え今の私たちが関係していなかったとして

も、こういうことがあったという事実を知ることができたのは貴重だったし、一生の宝となった。

最後に、一緒に過ごしてくれたメンバーをはじめ、11日間支えてくれた小林さん、そして、この素晴らしい研修旅行を企画していただいた李先生に感謝の意を表し、レポートの締めくくりとする。

7. 参考文献

研修旅行で撮影した写真

<https://tabimap.net/china/?p=13>

<https://www.sankei.com/life/news/160326/lif1603260045-n1.html>

中国東北部を訪れて

19I217 山本葵楽

大学に入学して約半年が経った。行ったこともない中国の言語を一から勉強することはとても大変だ。以前、日本在住の中国人の友人にこのように言われたことがある。「日本のメディアは中国に関して偽った報道をすることが頻繁にある。だから、私は日本のメディアを信用していない。」このように話す友人の切ない表情が、私はずっと忘れられなかった。いつか中国を訪れて自分の目で中国を見てみたいと思っていた。そしてその機会は想像よりも早く訪れた。この中国研究旅行は必ず自分が持っている価値観を変え、自分自身を成長させてくれると思い、参加を決めた。

私は事前課題で旧満州について調べた。中学校や高校での歴史の勉強で最低限の知識はあったものの、漠然としか知らなかつた。追求していくと、満州国が建国された背景や、満州国で当時の人々がどのような生活を送っていたのかがデータとして詳しく出てきた。満州国は幻の国とも呼ばれ、日本与中国では満州国に対する認識が異なることも、調べていくうちに知った事実の一つであった。これを踏まえて一人の日本人として、どのように満州国の歴史に対して向き合うべきなのかを考えると、とても難しかつた。本で読むだけでは、頭の中でしか理解できない。しかし、頭で理解するよりも、実際にその地を訪れて、心で感じる必要があると私は感じた。

まず大連では、南満州鉄道株式会社旧本社ビルに訪れた。町の中で一際目立つ立派な西洋作りのモダンな建物であった。南満州鉄道会社は、日露戦争勝利後の1906年に設立された会社で、大連はもちろんのこと、中国東北地方の開発へ大きく関わってきた。旧大和ホテル（現大連賓館）や大連港など現在の大連の都市インフラの基盤を作る役割を担つた会社である。そして現在も、中国鉄路局の大連支局として使用されている。建物の中に入ると担当の方がお迎えてくれて、とても流暢な日本語で建物や当時の資料について、私たちに説明してくれた。当時の資料となる様々な展示やパネルが置いてあつた。教科書を見るよりも、その場所に行って、その当時の資料を見ることに大きな意味を感じる瞬間であった。

次に訪れたのは、旧日本人街である。大連は満州国を中心地であったため、満州鉄道会社の社員や日本人将校などを中心に多くの日本人がこの場所に住んでいたそうだ。実際に歩いてみると、その建物のほとんどが取り壊されており工事されており、当時の街並みがそのまま残っているとは言いにくいような状態であった。しかし中には、今でも残っている立派な建物やカフェなどもあり、今でも存在している街であった。

長春では、偽滿皇宫博物院や長影旧址博物館を訪れた。長春はかつて、満州国（伪满洲国）の都城であった。偽滿皇宫博物院には、満州国時代に満州国の皇帝、愛新覚羅溥儀が住んでいた宮殿や執政していた宮廷府などがあった。中に入ると、高級感溢れる赤色のカーペットや、当時使われていたとされる寝室など、まるで当時の空間にタイムスリップしたかのような煌びや

かな王室の空間が広がっていた。当時の生活様式をイメージしやすい場所であった。長影旧址博物館には、満洲映画協会が作り上げた映画の資料が多く展示されていた。満洲映画協会の設立は、満州鉄道の進捗状況などを、映像の記録として残すために設けられていた「映画班」を拡充した満鉄映画製作所に始まったものであった。まさに王道樂土を建国理念にして作られた満州国独特の、中国の他地域とは異なる文化の一部ともいえるだろう。

北京では、八達嶺、定陵、故宮博物館、天安門広場など現在でも有名な観光地として名を誇る様々な場所を訪れた。大連や長春で訪れた満州国に関わる場所の見学を通して北京を訪れるとき、感慨深いものがあった。八達嶺は、万里の長城のうち、最も早く観光地として一般公開された場所である。そして現在の遺構は、満州国時代からはるか昔に戻った明代に建設されたものである。万里の長城は世界中でも有名な観光地だが、私は初めて訪れた。実際に登ってみると、道は想像以上に険しく、急な坂道であった。雨が降っていたこともあり、下りの時には、手すりが必要不可欠なほど大変な道のりであった。しかし、登り終えて見渡す景色には、疲れが吹き飛ぶほどの感動であった。歩くだけでも苦労するこの道で、戦が行われていたと思うと、何とも趣深く、恐ろしい事実であると感じた。また、故宮博物館では、明清朝の旧王宮が堂々とそこに顕在していた。門をくぐって初めて見た時の感動は忘れられないものである。大勢の観光客でにぎわっていたが、耳をすませば王宮で暮らしていた人々の会話が聞こえてくるのではないかと思うほどに、当時の華やかな王宮が広がっていた。

事前授業と 11 日間の研究旅行を通して、中国の歴史から現代まで、私が 18 年間生きてきて知らなかったことを沢山学ぶことができた。同じアジアの国であるが、言葉も文化も違う。しかし、互いを尊重することができれば、心が通じることが分かった。それを教えてくれたのが、交流会だった。東北師範大学の日本語学科の生徒の皆と過ごした時間が、私にとっては、一番の思い出だ。隣に座った李ちゃんは同じ一年生の女の子だった。一年生は日本語の授業をまだ三日しか受けていないと聞いていたため、最初はどのように会話をしたらいいのかわからなかった。しかし、この貴重なチャンスを自分の勉強不足で無駄にしたくないと思い、知っている中国語の単語と英語を用いて、必死に会話をした。笑顔で話しているうちに、だんだんと打ち解けあうことができた。そしてふと気付いたら、私たちは一緒にいる間、ずっと腕を組んで歩いていた。言葉が不十分でも、互いに理解したいという気持ちがあれば、分かち合うことができるということが分かった。そしてこの体験と同時に、「もっと中国語が話せたら、もう少しうまく会話ができるのだろう。」という後悔も募った。次に李ちゃんに会う時は、必ずすらすら中国語を話せる自分になって会いたいと思う。研究旅行を通して学んだのは歴史だけではない。この研究旅行に参加したから、東北師範大学の生徒の皆、共立の先輩方、同級生の二人にも出会えたのだ。今回の経験を通して、中国の様々な歴史に触れられたことと共に、貴重な人ととの出会いに感謝したい。

参照 Wikipedia

満洲国を通して見る過去と現在の中国

18i195 松野夏未

1. はじめに

11日間の中国研修旅行は大連、長春、ハルビン、北京という4都市を回り、日本と中国の歴史を感じるものであった。どの都市も初めて訪れ、日本と隣国でありながらも全く風土が異なる土地であり、4都市それぞれも特徴がある場所であった。

事前レポートでは満州鉄道について調べたので、どの街へ行っても満州国時代の建物が残り、文化の混合を感じた。事后レポートでは実際に南満州鉄道株式会社が作った建造物を見て感じたことについて述べていきたいと思う。

2. 大和ホテルとその他の現在

大和ホテルの現在

事前レポートでも述べたように、南満州鉄道は日露戦争で日本が勝利し、ロシアが中国に引いていた東清鉄道を譲り受けたものである。東清鉄道よりも長距離で、駅の周辺には人々が生活をするための病院や学校、家屋が多く建てられ、街を作った。

ここからは実際に南満州鉄道株式会社が建てた建造物の現在の写真、過去の写真をふまえていきたいと思う。

一代目大和ホテル



ロシア時代に建てたホテルである
「ダルニーホテル」を使って、1907年
8月にオープンした。

ホテルとしての役割を終えてからは、
洲鉄道会社の鉄道教習所、郵便局となり今は取り壊されてアパートとなっている。そのため、写真は過去のもの。

二代目大和ホテル



二代目は一代目の客室が少なかったため、1909年5月南満州鉄道の事務所が置かれていたところを二代目大連大和ホテルにした。ここには、夏目漱石も満洲めぐりの旅の際に宿泊した先だと、彼の隨筆に書いてあるそう。

三代目大連大和ホテル→大連賓館



1914年8月に中山広場前に三代目大和ホテルが開業した。

目前にはロシアが建てた市役所であるなど、街にはロシア人設計の建物があった。そのため、ロシア建築の雰囲気を壊さないよう、日本人設計士もロシア風の建築デザインにした。

また、長春などにも大和ホテルはあるが、大連の大和ホテルは東アジアの3大高級ホテルであった。

次に、大和ホテルがどのようなホテルであったか漱石が書いた『満韓ところどころ』から見ていく。

※当時（1905年くらい）1円=今の約4000円

食事料	朝食1円 昼食1円50銭 夕食1円75銭	食事はフランス式で、料理人はフランスでは修業したことがある人を採用
入浴料	1回 50銭	
理髪代	髪刈り50銭 髭剃り25銭 シャンプー25銭	熟練の理髪師がおり、アメリカの当時最新式水力自在椅子を理髪用として利用
ビリヤード料 (1ゲーム)	アメリカ式25銭 イギリス式50銭	
酒場		各国の高級な酒、たばこ
クリーニング		専用の蒸気洗濯所があり、1日以内に仕上げる
移動		VIP用の馬車で英國式の乗合を備える
娯楽		ビリヤード、ドミノ、ルーレット、カード、碁、将棋、図書、写真集…

設備		冬場の蒸気暖房の完備、夜間の電灯配置、寝具、食器、室内の装飾へのこだわり…
ことば	英語	

値段を見なくても、当時の一般庶民には手が届かないような贅沢で豪華なホテルであったことがすぐにわかるだろう。ことばが英語、料理がフランス、娯楽がビリヤードやカードであることから欧米を意識したホテルであることもわかる。このように、欧米を意識するのは、この大連が自由貿易港であるため、多くの日本人を含む外国人が利用していたからだ。終戦になり、満州国にいたほとんどの日本人は大連港から帰国している。

また、二代目の役割が終えてからは、満鉄大連医院分院（1914-）、満鉄地質調査所、満蒙物資参考館（1926-）、満洲資源館（1928-）、東北地方史博物館（1945-）、東北資源館、大連自然博物館（-1998）。それ以降は現在までは未使用のままになっている。

今回の研修では9月5日に旧ロシア街見学として訪れたが、100年以上前に建てられたものは思えないほどしっかりとと思っていた。また周辺の建物もロシア風であり、観光として街の雰囲気を活用しており、現在とつなげていてはいいことだなと思った、しかし、建物自体は現在使われていない状態で、ホテルの前には噴水も水は貼っておらず、少しさみしさを感じる場所だった。

その他の現在

國務院（中央行政機関）1936年完成→吉林大学薬学部（基礎学部）



関東軍司令官公邸→松苑賓館（ホテル）



交通院→吉林大学薬学部



滿州國皇居→大学校舎



満州國皇居として建築されたが、途中で日本
が戦争に負けたため使われなかった。

満州国時代の大連市内地図



3. 鉄道のレール

まず、レールについて簡単に復習する。南満州鉄道のレールはロシアが作った東清鉄道に沿って作られたが、日本とロシアではレール幅が異なるという問題が起きた。そこで、日本軍はロシアのレールを活かして新たに1本レールを引くことに決めた。

現在は当時のレールが残るのは一部に限られている。私が実際に見たのはハルビンに流れる川に架かる橋の線路だ。ロシアが作った2本、日本が継ぎ足した1本の合計3本のレールがひかれていた。

日本軍が引いたレール 東清鉄道のレール



4. おわりに

私は高校までの歴史の授業で学んだ中国、満州国についてしか知らなかつたが、今回の研修旅行を通して、より詳しい歴史について、現在の中国について学ぶことができた。そこには、日本が植民地として土地、人々を支配して強制的に統治してきた背景と共に、それにより経済発展、生活が近代的になったという遠い目でみればいい点もある。しかし、日本と中国両方の人々につらい経験を与えた惨い結果しまったことも忘れてはいけない。中国以外にも日本は戦時中にひどいことをした事実があり、その事実があったことを理解するべきだと思う。また、自由行動の中で、どの街の人も知らない中国語ながら理解してくれ、お札を言ってくれる人も多く、中国の方のおおらかで優しい一面を知ることができた。今回の研修で始めて中国語を実際に使ってみたので、これからは日本に来ている観光客の人へ話せるようになりたい。

5. 参考文献

[大連観光スポット「大連賓館」](http://dalianpress.com/dalian-yamato-hotel/) <http://dalianpress.com/dalian-yamato-hotel/>

[中国東北部](http://sanjyunotou.cocolog-nifty.com) <http://sanjyunotou.cocolog-nifty.com>

[昔の1円は何円？](http://sirakawa.b.la9.jp) <http://sirakawa.b.la9.jp>

中国人はなぜ声が大きいのか

17I216 新田珠生

1. はじめに

「中国人に対してどの様なイメージを持っているか。」そう尋ねられたとしたら、恐らく日本人のその多くが、「声が大きくて品がない。」「順番を守らない。」などマイナスのイメージを口にするであろう。

かくいう私も、電車などの公共の交通機関で、まるで発表会でもそこで開いているのでないか、と思ってしまうくらいの音量で話す中国人や、混んでいる店内などで、まるでバーゲンセールのおばちゃんのように、人を搔き分けに搔き分けて歩く中国人観光客を見てきていたので、「中国人」＝「がめつい」という方程式が自然と成り立ってしまっていた。しかしながら、大学に入学し、中国語を習い始めたことで、そのような方程式に変化が生じ始めた。そして、今回の研修旅行で、私自身が「観光客」として中国に訪れたことで、その方程式は大きく変化した。

本レポートでは、日本人が中国人に抱くイメージの中から、「何故中国人は声が大きいのか」に論点を絞って考えを深めていくものとする。その際には、私自身の実体験や、私の身の回りにいる中国人の方の話を参考にしていくものとする。

2. 声調の重要性

中国人の声が大きい理由の一つとして挙げられるのが、中国語には四声、もしくは声調と呼ばれるアクセントが存在していることである。中国語は、この抑揚によって語句の意味が変わってくる。言い換えれば、声調を間違えると単語の意味が変わってしまうのだ。これは、日本語のイントネーションの部分とよく似ている。例えば、日本語でも「橋」と

「箸」と「端」はどれも「はし」と発音するが、それぞれの発音はどれも若干違う。中国語は全てがその絶妙なイントネーションによって成り立っている。中国語で会話を成立させるためには、はっきりと話さなければならぬのだ。私自身も中国語を話すときは、自ずと日本語を話す時よりも、声が張り、尖ったような口調になる。

また、日本語ははっきりと発音せず、どこかぼやかして話すのが美しい風潮にある言語である。つまり、同じ漢字を使っていても、日本語と中国語は、対極にある言語であるのだ。そのギャップも相まって、日本人の耳から聞く中国語は、なおのこと大きく、強いものになっているのではないかと私は考える。

3. 集団生活における自己主張

「中国人は命よりメンツを大切にする。」という言葉があるように、中国は非常に「メンツ」を大切にする文化がある。迷惑を掛ないことよりも、和を保つことよりも、メンツを

保つこと、競争に勝つことが大事とされるのだ。そして、中国人皆がメンツを大事にする価値観を共有しているため、自分のメンツを守ることはもちろん、他人のメンツをつぶさないことにも、一際気を遣わなければいけない。そしてこの「メンツを重んじる文化」からも、中国人の声が大きい理由を読み取る事ができる。

これは中国人の先生に聞いた話である。中国では第三者がいる場で会話をする時は、なるべく他の人にも聞こえるように話す習慣があるそうだ。これは、「あなたの陰口を言っている訳ではないのよ。」というアピールであるというのだ。更に、中国人は日本人と比べて、プライバシーに関するこだわりも薄いため、個人的な会話を聞かれるのが嫌という意識も比較的弱い。そんなことよりも、他者にメンツをつぶされたと誤解されたり、逆恨みされることの方がよっぽどリスクなのである。よって、皆第三者がいる場では、一対一のときよりも、自然と声が大きくなってしまうのである。

また、「大きな声のものが、会話の主導権を握る。」という風潮も、中国人の声が大きい原因の一つとしてあげられる。大きな声で発言しなければ、自己が主張出来ないのである。実際に、中国人の会話を注意深くみると、まるで競りのように、声に声を重ね会話をしている場面を多く見受けた。

4. 民族間同士の会話で生じる壁

中国が多民族国家であることも、中国人が声の大きい理由の一つとして挙げられる。

中国は、全人口の 92% は漢民族で、残りの 8% は 55 の民族から構成されている。中国政府は、学校教育ですべての民族に中国語を教えているため、全国民の 95% が中国語を話せるとされている。しかしながら、55 の少数民族は、みな独自の言語を持っており、中には中国語があまり上手に話せないものも存在している。また、漢民族同士でも、地域によっては中国語の訛りがひどいため、出身の違う者との会話では、注意していないと聞き取れない時があるそうだ。

私の母からも似たような話を聞いた事がある。母が学生時代に働いていたアルバイト先に、二人中国人がいたそうだ。その二人のうちの一人が東北部の出身で、やはりその人の話す中国語は聞き取りずらかったという。このようなことからも、中国人の声が大きい理由を読み取る事ができる。

5. インフラ整備に伴う騒音問題

中国人の声が大きい理由は、言語的な特徴や文化・習慣的な特徴以外にも実は理由がある。それは、日常生活や建設工事などに伴うさまざまな「騒音」である。私自身も、中国に実際に行ってみて、やはり街中は非常にうるさく感じた。街中では常に何らかの工事の音や、クラクションの音が響き渡っていたからである。

2014 から 15 年に行われた調査で、中国でおよそ 16% の人が何らかの聴覚障害、難聴を患っていることが明らかになった。また、17 年に世界保健機関が行った調査とドイツの企業

が世界 20 万人を対象に行った独自の調査から作成された「世界聴力指数」によると、広東省広州市は世界の主要都市の中で最も騒音公害がひどいとされ、住民の平均聴力は実年齢よりも 17 歳以上悪いという結果となった。都市の騒音公害と難聴の間には密接な関係があることが、これにより判明した。騒音の中で日々を過ごしていくうちに、徐々に耳が悪くなり、声も相対的に大きくなってしまって言うわけだ。

6. おわりに

中国人観光客に対してそれまで感じていた、「声が大きい。」「品がない。」といった思いは、実際「中国」の土地に足を踏み入れてみると、それほど感じるものではなかった。寧ろ私は、ストレートに、隠さずに様々なことを話してくれる環境に居心地の良ささえ覚えた。

日本に帰ってきた際、家族に「声がうるさい。」といわれた。恐らく、前述した様々な理由が折り重なった結果であると考えられるが、たった二週間でもこうなってしまうのだから、日常的に大きな声で話す中国人が、観光地ですぐに小さな音量で話せるわけがないな、と実感した。

「郷に入っては郷に従え」とよく言うが、習慣的に行ってしまっていることをすぐに直すことはなかなか難しい。その土地の文化にすぐに適応できるのが一番良いことではあるが、ホスト側もその土地の文化を少しでも理解し、寛容に対応していくとよいのではないかと今回の旅行を通して強く感じた。

ハルビンについて

16I129 材木谷 友里

今回の中国研修旅行では大連、長春、ハルビン、北京の4都市を巡りました。中でも非常に興味深かった街がハルビンです。今回の研修旅行で行かなかったら一生知らない地であったと思います。この街はロシアと国境を結ぶ中国でも北部に位置する省です。このハルビンはロシアと文化交流が盛んであり、市街地の賑わいの中に、ロシア文化の影響を受けたものや、ロシア人、ロシア料理屋など様々な分野において、ロシアと密接につながっていることが見て取れました。

そんなハルビンがどのように今まで発展してきたか、歴史を調べ、まとめようと思います。

ハルビンは未だかつて城壁で街を囲まれたことのない都市です。その歴史はとても長く、2万2千年前の旧石器時代末期に人類がここで暮らし始め、黒龍江地区の最も古い古代文明国になりました。また金と清の王朝時代の発祥地として市内には極楽寺、孔子廟、閻家岡、七級浮屠塔、金国の都などの数多くの文化財が残っています。

1896年～1903年、中東鉄道の建設にともない、ハルビンは次第に近代都市として発展してゆきました。20世紀初期には次々と33の国からの16万余りの華僑がここに定住するようになり、そのため16カ国は領事館を設けハルビンは国際的な貿易都市になりました。

中国共産党が1946年4月28日にハルビンの支配権を掌握し、ハルビン特別市政府が設立されました。これによってハルビンは中国初の解放都市になりました。観光都市として、ハルビンは異国風情と盛大な雪まつりによって大勢の観光客に好まれています。

1891年 明治24 帝政ロシアがシベリア鉄道建設に着手、5月31日、ウラジオストックの駅予定地で皇太子ニコライが出席して鉄道起工式が行われた。1894年明治27 8月、日本が清国に宣戦布告。1895年4月日清講和条約

1896年 明治29 ロシアが露清条約により東清鉄道（満州里～綏芬河）の鉄道敷設権を獲得します。

1897年 明治30 3月東清鉄道会社C. E. R設立。

1898年 明治31 ロシアが遼東半島（旅順、大連）を租借し、哈爾浜と大連を結ぶ 東清鉄道南部線の敷設権を取得する。ロシアは鉄道ルートと松花江（スンガリー）が交差する場所に街の建設を開始する。ここが哈爾濱市です。

1899年 明治32 ロシアが 哈爾浜 の都市計画を策定、鉄道管理局を設けて鉄道工事を開始します。

1900年 明治33 駅の南側の南崗に 中央寺院 嫁工。

中央寺院はロシア正教の教会、正式名は聖ニコライ会堂。古代ウォルゴッド様式で北ロシア風に丸太を組上げて建てられます。

中央寺院はハルピンを象徴する建物となり、1966年の文化革命時に取壊されて跡地はロータリーになりました。

松花江鉄橋が完成。松花江岸に傅家甸 ができます。陸軍大尉石光真清がロシア調査の目的で哈爾浜に入ります。

1901年 明治34 哈爾浜～綏芬河 間の鉄道完成。石光真清が馬家溝に写真館を開きます。

1902年 明治35 哈爾浜～満州里 間の鉄道完成。

1903年 明治36 哈爾浜～旅順 間の鉄道が完成し東清鉄道全線営業開始。右は哈爾濱駅。

建物はアールヌーボー様式である。現 哈爾濱駅は1950年代に建替えられた建物。

キタイスカヤ街、モストワヤ街の建設を開始する。

1904年 明治37 2月、日本人引揚。日露戦争始まる。

哈爾浜 ヤマトホテル 竣工。露が「東清鉄道 理事公館」として建設したが1935年から満鉄が「ヤマトホテル」として経営します。

1905年 明治38 5月、日本海海戦。9月、日露講和条約。

日本がロシアから東清鉄道と南部鉄道線の経営権を取得する。

1906年 明治39 南満州鉄道 設立、初代総裁後藤新平。

旅順、大連地区および南満州鉄道の守備部隊として関東軍が組織されます。

キタイスカヤにモデルンホテル 営業開始。モデルンホテルはフランス ルネサンス様式の建築でホテルに併設して咖啡、レストラン、劇場がありました。1913年から満鉄の経営、部屋代は浴室無しが2円50銭～4円50銭。劇場は欧米映画上映専門。

1907年 明治40 キタイスカヤ通りにルネサンス様式の松浦洋行開店

1909年 明治42 西本願寺附属小学校（後の桃山小学校）設立、最初の児童数4名。

伊藤博文が哈爾浜駅構内で安重根に暗殺されます。

1912年 大正元年辛亥革命により清国が倒れます。日本人は1086人。

1914年 大正3年第1次世界大戦始まります。

哈爾浜特務機関建築

傅家甸の市街造り開始。

1917年 大正6年ロシア革命

ヨット俱楽部竣工

ヨット俱楽部

1918年 大正7年ロシア革命によって囚われたチェコ軍の救出を名目に日本がシベリアに出兵する。

1919年 大正8年五四運動

チューリン百貨店竣工。ロシア人が経営していた百貨店でウォッカ、紅茶、毛皮などの工場も持つてチューリンブランドも販売していた。

チューリン百貨店

東洋拓殖株式会社支店開業。東洋拓殖株式会社は朝鮮に日本人移民を送り込む事業を進める目的で1908年（明治41年）に設立された国策会社です。しかし事業がうまく進まないので1917年から事業範囲を満州にも拡大し、不動産・金融、投融資を行っていました。

1920年 大正9年シベリアの白系政府が倒れ、数万人のロシア人が北満に逃げ込みます。哈爾浜人口33万人、内日本人3600人

日露協会学校開校。大正6年、日露協会が「露語講習所」を設けた。大正9年、これを発展させて、ロシアの経済に通じ、風俗習慣人情に通じる人材養成の為の公費学校を設立しました。設立委員長は後藤新平です。1933年に「哈爾浜学院」となります。1945年廃校、多数の学生がソ連抑留となりました。卒業生1412名。1987年に同窓会が「哈爾浜学院史」を刊行しました。

1922年 大正11年 シベリアから撤兵

1923年 大正12年 9月1日、関東大震災

日本人小学校校舎完成（設計ジダノフ）

哈爾浜桃山尋常高等小学校に改称

【桃山小学校小史】

明治42年 西本願寺附属小学校

明治43年 哈爾浜日本人居留民会附属小学校

大正5年 哈爾浜尋常高等小学校

大正12年 新校舎完成

昭和16年 桃山在満国民学校と改称

昭和20年8月16日 活動停止

桃山小学校

桃山小学校（昭和12年当時）

1924年 大正13年 第一次国共合作、モンゴル人民共和国独立宣言

1925年 大正14年 治安維持法

1927年 昭和2年 10月市電が開通、距離16km、南崗地区と埠頭区を結んでいた。1987年に廃線。

市電

市電一待っているのはハルビン高女生徒、市電の向こうは博物館

1928年 昭和3年 5月、与謝野寛、晶子来哈

哈爾浜は帝政の世の夢のごと白き花のみ咲く五月かな 晶子

6月4日、張作霖爆殺

哈爾浜広報電台が南崗長官公署街の新庁舎でラジオ放送を始める。周波数は674Hz、出力1kw。1932年に満州電信電話株式会社に移管される。

哈爾浜広報電台

1932年 昭和7年 満州国成立、関東軍が哈爾浜を占領。9月、満州航空設立。

松花江氾濫

満州開拓移民団が佳木斯（ちやむす）に入る。

ソフィスカヤ寺院竣工

ソフィスカヤ寺院

1933年 昭和8年 哈爾浜学院創立

1934年 昭和9年(康徳元年) 特急「あじあ号」新京一大連間で運転開始

特急あじあ号

哈爾浜女学校開校。哈爾浜女学校は始めはウクライナ協会クラブを借用して開校した。第1学年は52名。昭和10年に馬家溝に移転。昭和18年に哈爾浜富士高等女学校と改称。

哈爾浜女学校

1935年 昭和10年 中国「抗日救国宣言」

ソ連が新京～哈爾浜間鉄道を満州国に譲渡、特急「あじあ号」が哈爾浜まで延長される
花園小学校、哈爾浜中学校新設、ホテルニューハルビン着工

1936年 昭和11年

1937年 昭和12年 盧溝橋事件

満州拓殖公社設立

4月27日、室生犀星が哈爾浜「モデルンホテル」に宿泊、ホテル向いの喫茶店「マルス」に行く。喫茶店「マルス」ではロシア娘がブランデーを入れたロシアケーキ、アイスクリームサービスする。チョコレートはロシア美人を描いた化粧箱に入っている。

喫茶店マルスの少女光りて 露西亞娘の大きな臀うごき

日もすがらお茶をはこべり。

大きな脣だぶつけども 少女は少女ゆゑ清げなり

われ とつくにありて 大きな脣眺め

詠めぬ英字新聞に肘をつき 大なる虎のごと悲しむ。

犀星

1939年 昭和14年 5月、満蒙国境でノモンハン事件勃発、9月停戦

1940年 昭和15年 皇紀二千六百年

1941年 昭和16年 12月8日、真珠湾攻撃により太平洋戦争勃発

1945年 昭和20年 ソ連が日本に参戦、北満州に侵攻

8月15日敗戦

1946年 昭和21年 满州から邦人引き揚げ、一般人百万人。ソ連抑留者五十万人。

右の絵は 哈爾浜富士高等女学校 堀野敦子 氏の「38度線を越えて」

以上が戦前のハルビンの歴史となります。戦中は日本との関係を悪化させ、今でも対日思想をもった市民がハルビンには沢山います。

歴史・文化を現地で学ぶということ

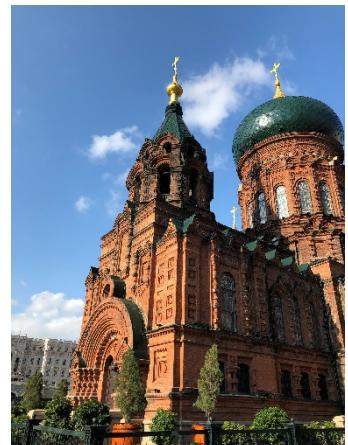
17I145 杉田奈那

今回は、私が印象に残った二つの都市（ハルビン、北京）について紹介していく。はじめに、ハルビンから紹介していく。

安重根記念館では、ガラス越しに伊藤博文が暗殺されたとされる駅のホームを見学した。高校時代の歴史の授業で、事件について軽く触れたことがあり、特に興味はなかったが、実際にその現場を目の前にすると、ここで本当にあったのだなと少し関心を持った。さらに、当時伊藤博文と安重根がいたとされる位置や暗殺される瞬間の実際の写真を見て、より現実味が増したように感じられた。館内は、日本語の表記はほとんどなく、中国語と韓国語での表記案内であった。最後に、自由にメッセージをかけるブースが設けられており、内容を少し確認すると、韓国人による安重根に対する感謝がつづられてあった。人が殺されているにも関わらず、加害者に対する感謝のメッセージに驚いたが、当時の状況を考えると、そう思うのも仕方ないくらい苦しい状況に置かれていたのかなと思った。

ハルビンはロシアに近いということもあって、北京や長春と比較すると、欧風の建物が並ぶ市街地街になっていることが一目でわかった。例えば、聖ソフィア大聖堂はロシア正教の教会として建築されている。聖ソフィア大聖堂の歴史を調べていくと、1903年にロシア帝国の軍隊がハルビンに侵入し、1907年に帝政ロシアの兵士の軍用教会として建設されていたそうだ。屋根の形や壁面の模様からいきにもロシア風であったため、中国にいるとは思えないような不思議な感覚になった。

ハルビンで宿泊するホテルには大きい商店街があった。その周囲



の街並みは、聖ソフィア大聖堂と同じように、ロシアの影響を大きく受けしており、中国に居ながらも西洋を感じられた。例えば、商店街のBGMが中国特有の弦楽器の音ではなく、JAZZ調でトランペットなどの金管楽器が目立つ音であったり、洋楽を歌うステージが設けられていたりなど、長春とは違った雰囲気を感じられた。とあるおみやげ屋に入ると、月餅などの中国の定番のお菓子は見られず、チョコレートなどの洋菓子が多く陳列していた。パッケージはマトリョーシカやお酒のモチーフであったり、表記もほとんどロシア語で書かれていたりなど、中国らしさが感じられなかった。夕食は、ホテ

ルの近くにあるレストランでロシア料理を堪能した。ロシア料理は今回が初めて出会ったので、主食はコメではなく、パンやパスタなど小麦中心であることが発見できた。また、グラスに注がれたジャスミン茶が透き通った青色で驚いた。ハルビンビールは、ヨーロッパ系のお酒なので、アルコールが強いのではないかと勝手に思い込んでいたが、意外と飲みやすかったのが印象に残った。しかし、北京にある普通のビールと比べると、ハルビンビールの方が少し苦みを強く感じられた気がする。中国国内の地域ごとに、お酒の味が異なっているのかどうか気になった。

次に北京について紹介していく。前門大通りは、路面電車が走っていたり、古い町並みが続いていたりと、レトロな雰囲気であったので印象に残った。前門大通りは明や清の時代から続いている歴史ある商業地区であるそうだ。写真の『同仁堂』は中国では有名な漢方薬の専門店で、歴史は古く、1668年に創立したと言われている。また、2006年には、国家级無形文化遺産に登録されたそうだ。



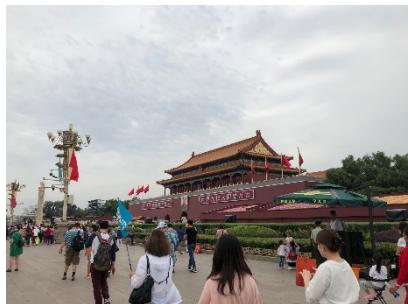
前門大通りにある建物の多くは、赤色と寒色系が多く使われており、左の写真からわかるように、細かい模様が装飾されている。さらに、ほとんどの建物が三階建てで建設されていた。これは高さを均一にして、見栄えをよくするためなのかどうか気になった。



10日は万里の長城へ行き、八達嶺長城から女坂を登った。天候は雨で、地面が濡れており、かなり滑りやすくなっていたことが印象に残っている。地面は、急傾斜でかつてこぼこした石で敷き詰められていた。週に二回サークルで体を動かしているのにもかかわらず、一回一回休憩しないと動けないくらい登ることがきつかった。しかし、これは当時万里の長城を作った当事者の狙いで、敵を精神的にも体力的にも追い込む作戦だったのだろうと思った。また、全体を見渡す



ができたため、敵の行動や位置を確認しやすく、見張りとして最適な場所だと思った。夕食は毛沢東も来店したことがあるというレストランへ行き、北京ダックを堪能した。鶏一羽をさばくパフォーマンス（？）は初めて見たが、それが普通なのか、観光客向け用に行なっているのか少し疑問に思った。餃子の皮のようなものに、お肉や香味野菜、タレをつけて丸めて食べるもので、日本人の口によく合うと思った。



11日は、天安門広場を見学した。ニュースでよく見かけるところに行くことができたので、少し気分が上がった。平日にもかかわらず、観光客で混雑していたという印象があった。南北に880メートル、東西に500メートルという世界最大規模の広場を実際に歩いてみると、足が疲れるくらい道のりが長かった。政治に関連しているところだけあって、警察による警備がとても厳しそうだなと思った。いたるところに警察の人が監視していて、さらに凝視していたため、とても気になつた。天安門広場だけでなく、普通の住宅街にも警察が監視していたので、日本とかなり違う部分があると思った。監視によって犯罪から守られるかもしれないが、日本でも同じようなことを行われると、少し生活しづらそうだなと思った。

感想

今回の事後レポートは、4都市のうちハルビンと北京から自分が最も印象に残ったものを抜粋した。ハルビンは冒頭でも書いたように、中国ではなくロシアにいるかのような街並み、雰囲気でとても新鮮であった。人も、ヨーロッパ系の人種が多く見られたので、アジア系以外の人を目にすることもとても不思議であった。北京は、はじめは空気が汚いというイメージがあったが、思っていたよりも普通で、マスクをしている人も見かけなかったということが印象に残った。今回の研究旅行を振り返ると、ただ楽しい観光ではなく、日本与中国に関する歴史や文化を学ぶことができる有意義な旅行であったと思う。歴史や文化は、単に教えてもらうのではなく、実際に足を運んで目にしたり、耳で聞いたりなどをしたほうが、自分の知識としてしっかりと身についていくと思った。

中国の国際的立場や文化

17D548 高橋 美沙

1. 序章

古く中国はアジアの中で最も栄えていた大国といつても差し支えなく、日本も大陸の文化として輸入していた。その後、周辺諸国の急速な発達についていげず発展途上国となった。今なお、発展途上国とみられることも少なくはない。昨今、著しく進歩しているのにも関わらず先進国として認識されない原因や中国本土の文化について考察する。

2. 国際基準

先進国と発展途上国を隔てる水準は厳密には存在していない。しかし、OECD（経済開発協力機構）が発表している「ODA（政府開発援助）受け取り国リスト」が基準として用いられることが屡々ある。そもそも、OECD とは「経済的により進んだ国が経済発展途上の国々を支援するために全力で協力する」ことを目的にした国際的な機関であり、俗に「先進国クラブ」と呼ばれている。この ODA 受け取り国リストは3年ごとに更新されている。また、このリストには明確な基準分けがされている。一つは、世界銀行によって「高所得国」以外に分類される国々（2016年時点の一人当たり国民所得（GNI）が12,235米ドル以下の国々）であること。或は、国連によって後発開発途上国（Least Developed Countries）に分類される国々（一人当たり国民所得（GNI）、人的資源指数（HAI）、経済脆弱性指数（EVI）によって判断される）であること。中国は Upper Middle Income Countries and Territories に分類されている¹⁾。つまり、OECD の発表では発展途上国となる。

また、HDI（人間開発指数）によっても評価される。これは、生活水準や福祉、交通などの文化面を統計指数で表したものである。この指数に基づく定義では、発展途上国にみられる特徴が経済と産業が未発達で国民一人当たりの所得が低い国となる。実際、発展途上国と称される国々は失業率・貧困率・乳児死亡率が高く、平均寿命・生活水準・識字率・1人あたりの所得は低く、所得分配は不均等になっている。また、産業の開発・発展に関しては先進国だよりである。中国の行政区別 HID は次ページの通りである。

順	省など	HDI ^{[1][2]}	相当する国 ^{[1][注釈 1]}			
非常に高い人間開発						
-	香港 ^[注釈 2]	0.933	■ スウェーデン	18 河南省	0.725	
-	マカオ ^[注釈 2]	0.909 ^[注釈 3]	■ 日本	新疆ウイグル自治区	0.725	■ スリナム
1	北京市	0.887	■ チェコ	19 江西省	0.722	
-	台湾 ^[注釈 2]	0.907 ^[注釈 4]	■ エストニア	20 広西チワン族自治区	0.721	
2	上海市	0.863	■ リトアニア	21 安徽省	0.717	■ ポツナ or ■ モルディブ
3	天津市	0.845	■ チリ	22 四川省	0.711	■ ウズベキスタン
高い人間開発						
4	江蘇省	0.795	■ コスタリカ	23 甘肃省	0.685	■ パレスチナ or ■ イラク
5	広東省	0.784	■ トリニダード・トバゴ	24 青海省	0.680	■ イラク
6	浙江省	0.783		25 貴州省	0.674	■ キルギス
7	遼寧省	0.772	■ メキシコ	26 雲南省	0.666	■ モロッコ
8	内モンゴル自治区	0.767	■ ボスニア・ヘルツェゴビナ	27 チベット自治区	0.580	■ アンゴラ or ■ カンボジア
9	吉林省	0.760	■ ブラジル	注釈		
10	福建省	0.758	■ アゼルバイジャン or ■ レバノン	1.	元のソースではなくデータセットにより比較	
	山東省	0.758		2.	香港とマカオは中華人民共和国の特別行政区である。台湾は中華民国により統治されているが、中華人民共和国により領土と主張されている ^[3] 。	
11	湖北省	0.755	■ アルジェリア or ■ タイ	3.	マカオのHDIはデータベースにも国連報告にも含まれていない。マカオ特別行政区の政府統計・国勢調査によると、マカオのHDIは2016年に0.909であった ^[4] 。	
12	重慶市	0.752	■ エクアドル	4.	台湾のHDIは地方人間開発データベースに含まれている ^[1] 。しかし、中華人民共和国統計局によると2017年の台湾のHDIは0.907で日本や韓国における値に近い ^[5] 。	
-	中国(平均)	0.751		5.	コソボが独立国であるかどうかは議論されている。	
13	陝西省	0.750	■ ベルギー or ■ ウクライナ	↑ https://ja.m.wikipedia.org/wiki/中国行政区分の人間開発指指数一覧		
	山西省	0.744				
14	湖南省	0.744	■ コソボ ^[注釈 5]			
	海南省	0.744				
15	黒龍江省	0.741	■ フィジー or ■ モンゴル			
16	寧夏回族自治区	0.739	■ ジャマイカ			
17	河北省	0.731				

中国のHDIは国内で大きな格差が見られる。観光客が主に訪れる都市は高水準であるが、農村部などは低迷していることがわかる。この基準では、0.0800以上を超高度開発国、つまり先進国としている。よって、中国におけるほとんどの都市は発展途上国であることになる。これらの基準によって、中国は発展途上国であるという結論に達した。

3. IT 大国

中国は、前章で述べた結論とは対照にあるといつても良いであろう『IT 大国』という異名を持っている。中国が、発展途上国でありながら先進国のように捕らえられる主たる要因はこれだろう。ITは、グローバル化を円滑に進める重要なツールとなり得る反面、一種の戦争を引き起こす可能性を秘めているとされる。そもそも IT 産業とは、Information Technology industry の略称である。その内容は情報・通信技術に何らかの形で関係している経済活動全般を示す。また、情報技術の進歩に伴って、ICT (Information and Communication Technology) と表記されることが増えた³⁾。IT 産業を制することによって国家間における情報戦で優位に立つことが可能であるといつても過言ではない。

このような重要な産業界において発展途上国が名を馳せることが可能になった要因としては、中国のIT産業が世界中の企業の製造アウトソーシングを受け持っているということが挙げられている⁴⁾。中国国内のIT市場を見ると、その販売台数は眼を見張るものがある。その一方で、まだまだ国民1人あたりの普及台数は低い。この面について、今後も発展が見込まれている。そのため、大手企業は中国市場に注目し、結果として中国全土のIT産業が発達していると考えられる。

これらの事から、中国がIT大国の名を冠しているのは、発展途上国であり、市場の成長が見込めることが要因であると推測できる。

4. 文化

中国の国土は広大であり、その面積は 9,634,057km²もある。その広さ所以に、各地域ごとに異なる文化を持っている。彼らは、その地域の歴史や背景に基づいた性格やマナーを有している。例えば、北京は故宮などが存在する皇帝のお膝元であった事から役人文化、東北は狩猟民族的な一面を持つが、商売では臆病などといった風に特色がある。また、食文化にも大きな違いが見られる。中国の料理で有名なのは、上海料理・広東料理・四川料理・北京料理の 4 種類である。これらはそれぞれ食される地域の特性を示している。中国はその国土の広さや、歴史を要因とし、総じて似た気質を持っている一方でそれぞれの地域によって異なる気質も持っている。

5. 食文化

中華は前述の 4 種類を主として、多種類存在している。これらは、その地域に隣接している海や、その地域特有の気候が影響している。

上海料理は、中華料理の江蘇料理（淮揚料理）の菜系に含まれる代表的な郷土料理の一つである。東シナ海が近いため、海の幸が豊富で海鮮料理が多い。上海蟹や小籠包、生煎饅頭などが有名である。

広東料理は、粵菜（えつさい）と称され、中華料理の四大菜系、また八大菜系の一つである。中国の南あたりが発祥の地である。気候が暖かく、海に近いため、野菜や魚介が多く取れる。酢豚や焼壳、鱻鰭スープが有名である。

四川料理は、中華の中でも辛い料理が多く、その殆どに唐辛子や花椒などの香辛料を効かせている。湿度が高く、寒暖差の大きい地域のため発汗を促して健康を保つためであるとされている。麻婆豆腐や辣子鶏、魚香肉絲が有名である。

北京料理は、歴代中国王朝が北京に首都を定めて以降北京貴族の宫廷料理や、北京市民の家庭料理、屋台で提供される郷土料理のことである。山東省・山西省・河北省の料理を吸収して、北京風にアレンジしたものであるとされる。北京ダックや杏仁豆腐、皮蛋などが有名である。

他にも、山東料理や湖南料理、江蘇料理、浙江料理、安徽料理、福建料理、マカオ料理、台湾料理など多種類ある。

6. 総括

中国の都心部は想像以上に栄えていて驚いた。また、プロジェクトマッピングなども多く、IT 大国の大名は伊達じやないなと思った。今回の研究旅行で思っていたよりも多くのことを学べたのでとてもよかったです。また、機会があったら今回は行っていない都市や場所に行ってみたい。

7. 参考文献

- 1) https://www.oecd.org/dac/financing-sustainable-development/development-finance-standards/DAC_List_ODA_Recipients2018to2020_flows_En.pdf DAC List of ODA Recipients Effective for reporting on 2018, 2019 and 2020 flows 2019. 9. 19
- 2) https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/region/e_asia/china/index.html 外務省 2019. 9. 19
- 3) <https://www.weblio.jp/content/IT産業> IT産業 2019. 9. 19
- 4) <http://www.rikkyo.ne.jp/univ/masutani/sotsuron03.pdf> 中国のIT産業 製造アウトソーシングの現状 山田 陽子 2019. 9. 19

中国の歴史的建造物から見える日本・ロシアとの関わり

17I197 中道 実桜

今回の研究旅行では、大連、長春、ハルビン、北京の4つの都市を巡った。その中で私は、今まで都市に残る建物や歴史的建造物から他国との繋がりを強く感じた。特に中国の近代歴史に関わってきた日本とロシア独特の建物を多く目にした。

1. 大連で見る歴史背景

大連大連の中心部となる大連中山広場には、円形の広場を囲むように近代建築物が並ぶ。ロシア統治時代に建てられたものや日本統治時代に建てられたものが混在していた。その中でも日本人が設計したとされる建物は多くあった。実際に旧ヤマトホテルの内部を見学できた。満州鉄道が営業していた最も格式が高いホテルだけあって、外見から存在感があり西洋の雰囲気を醸し出していた。内部はシャンデリアや大理石によって高級感のある空間だった。100年前もこれと同じだったなら、高級ホテルということが納得できる。今は宿泊できないが、いつかまた行って宿泊してみたい。

ヤマトホテルの他にも日本人が設計した建物は今でも使用されており、日系企業も多く進出していた。日本との関係の強さは昔も今も変わっていないのだ分かった。しかし、昔と違うのは、近代建築物の後にそびえ立つガラス張りの高層ビルたち。これらが現在中国が示す世界的な地位を主張しているように見えた。また、広場から見回すとヨーロッパでもアジアでもない独特な街の風景を見る事ができた。

そして日露戦争において最も過酷な戦地だったとされる203高地にも行くことができた。教科書で見たことのある歴史的な戦地に行けることは感慨深いものであった。今も残っている防空壕には銃弾の跡があり、戦況の激しさが伝わってきた。そして、日本人が建てた石碑や乃木將軍が息子のために建てた慰霊碑があった。日本語で刻まれた部分もあり不思議な感じがした。それらが今まで残っていることも中国と日本が関わり続けていると感じることができた。

2. 満州国の首都 長春

長春は満州事変によって日本の支配下に置かれていた満州国の首都。満州国時代か日本人技師によって都市計画が実施され、現在の市街地が形成されていた。また、執政を行う官公所など多くの公的機関が設置されていた。現在も日本によって整備された道路や鉄道等の交通インフラは活用されていた。

満州国の最高行政機関であった満州国國務院は外観だけの見学だったが、日本の国会議事堂によく似ていたのが印象的だった。和風と中国風を折衷したような造りだった。当時は満

州国の政治の中心として機能していて、多くの日本人の幹部たちが登用されていたそうだ。また、関東軍司令部の外観も日本の城そのものだった。長春の街に急に日本風の建物が見えてきて不思議な雰囲気があった。入口には常に警備員がいて監視しているような厳肅な感じだった。現在は中国共産党が使用している。日本は長春の政治の基盤となる都市を造っていたのだとわかった。

大連とは少し違って政治の中心部でも日本人との関わりや日本風な建物があり、親近感があった。

3. ロシアの文化が残るハルビン

ハルビンはロシアの雰囲気が色濃く残る都市だった。中でも聖ソフィア大聖堂はハルビンを象徴するロシア建築。周囲はデパートなどの商業施設が立ち並んでいる繁華街の中でこの教会は異彩を放っていた。ロシア人が多く住んでいたことから、他にも教会や大聖堂が多数建設されていたそうだ。ハルビンで一番栄えていた大通りは、石畳みで西洋風の建物がずっと続いているヨーロッパの街並みのようだった。ロシア料理屋も多く、実際に食べることができ良い体験ができた。建築とともに食文化などロシア人たちが築いてきた生活の背景が残り続けていた。現在はロシア人の姿がないことに少し寂しさを感じた。

4. 世界遺産の都 北京

北京は中国の首都だけあり、これまで巡った4つの都市の中で一番現代化が進んでいる都市であった。中心部は高層ビルが多く歴史的な雰囲気は少なく先進国の街並みが印象に残った。レンタルできる自転車を乗る姿も多く目にした。

事前課題で調べた故宮博物院にも行くことができた。天安門広場にはたくさんの観光客で賑わっていて改めて歴史的に重要な場所とともに毛沢東の存在の大きさがわかった。故宮博物院の内部は想像していたものよりはるかに広く迫力があった。ここでは中国独特の豪華な飾りが皇帝たちの優雅で贅沢な生活を物語っているようだった。皇帝の象徴である龍がいたる所にあり、皇帝の絶対的な権威を感じた。

皇帝が天に対して祭祀を行った場所である天壇公園の圜丘壇は、上から見ると日本の相撲の土俵と同じ形だったのは面白いと思った。これは天は円く、地は四角という中国古代の宇宙観を表している。明確な日本との関わりはわからないが、相撲も日本古来の神事なので共通するものがあるのかと思った。意外な所で日本と繋がる部分があり、とても興味深かった

5. まとめ

4つの都市をまわって、様々な歴史的建造物や街並みを見ていったが、こんなに多く日本やロシアに関わっているとは思わなかった。それぞれの都市によって建物の様式や実際に行ってみて感じる雰囲気が全く違っていた。建物や街並みから中国の近代から現代までの姿や世界的な立場が変わっていくのがわかった。私が一番印象に残っているが大連の中山

広場の建造物。満州鉄道やヤマトホテルなど満州国時代のロマンが中山広場に集まっていた。結果的には満州国は滅亡してしまったが、当時は理想郷のような場所だったのだと思った。たった10年の歴史の中にあんなに大きな都市を造りあげ、今も残っていることも感慨深い。背景には戦争があって中国も日本も良い思いはしていないと思うが、残していくことで歴史を知り、語り継がれていくのだと改めて感じた。

そして、今回疑問に思ったのは文化大革命が起こっても歴史的建造物たちが残っているということだ。映画で文革の様子を見たことがある。どのようにして激しい改革運動の中で文化財を残すことができたのか不思議に思った。

大学に入り中国語を2年勉強てきて、それまで聞いていた中国の話を実際に見るととても感動した。予想を上回る中国の広さ、人口、歴史の深さ、現代化の速さが肌で感じることができた。もっと中国に興味を持てたし、日本との関係を知って身近な存在に感じた。今回の研究旅行で得たものを卒業研究で活かしていきたいと思う。

中国研究旅行を終えて

17I191 鳥屋部佳奈子

10日間の中国研修旅行を終えて、事前学習で調べた故宮についてと、10日間で印象に残った中国の人々の暮らしや文化についての二つの面を事後報告レポートとして書きたいと思う。

まず、故宮についてだが、その広さと優美さに圧倒された。建物の装飾を定期的に修復してはいるものの、建物自体は当時のままだという。柱や屋根の裏側、格子のひとつひとつに細かな装飾が施されており、さらに皇帝の象徴である黄色や中国では縁起が良いとされる赤を基調とした鮮やかな色で塗られている。皇帝の象徴として、黄色という色が挙げられるが、もう一つの象徴として龍がある。この龍は故宮の至るところに施されており、某テーマパークの隠れキャラクターのように探しては、それぞれの龍の違いを楽しむこともできた。私が発見した中で驚いたのは、瓦ひとつひとつの側面に描かれていることと、窓の枠組みの部分に描かれていたことだ。大きな建物の中で、とても小さな部分にも龍が描かれているのを発見した時、皇帝の偉大さや特別な存在だと周知されていることを感じた。また、屋根の裏側を見てみると、複数の色で華やかに施されている。それだけではなく、数々の柱や骨組みが重なって、複雑でありながら、その規則的に組み立てられている様子は建物の立体感や大きさをより強調していた。

故宮は、広大な敷地の中にいくつもの建物があるが、その建物で過ごす人や用途によって場所が分かれている。その中でも、男性である皇帝と、女性である皇后たちが過ごす建物の間には大きな門があり、二匹の獅子が構えているという他とは異なる構造があった。その獅子にも一般的な獅子とは異なる見た目とその意味がある。それは耳だ。一般的な獅子は耳が立っているが、ここに構えている獅子は耳が下に向いて垂れ下がっている。これは、女性は政治には関わらないことを示す徵であるという。さらに、男女が過ごす建物の境に立つ大きな門は、その公私の区別は明らかであった。

また、乾清宮の前には鶴と亀があり、長寿を願うものである。日本でも「鶴は千年 亀は万年」ということわざがある。これは古代中国で、鶴と亀が長生きすることから、長寿を願ったり祝ったりするものだと言い伝えられていたものが日本に伝わったのである。中国から日本に伝わったとされる文化が、本当に中国に存在することが確認できた物であった。

次に、10日間中国で過ごす中で気がついた人々の暮らしや文化についていくつか挙げていきたいと思う。私は10年前まで中国で6年間住んでいたのだが、その頃の中国の街中はゴミのポイ捨てが多いイメージが強かった。しかし今回、研修旅行中にゴミのポイ捨ては私が見る限り見当たらなかった。その代わり、頻繁に目にしたのはゴミ箱だ。街の至るところにゴミ箱が設置されており、さらにそれを管理している清掃員が数多くいた。私の個人的見解になってしまふが、近年多くの中国人が日本を訪れている。世界の中でも綺麗だとされている日本の街中を直接目にした中国人が、その過ごしやすさと心地よさを少しでも真似ようとし、街を綺麗に保とうとする意識が芽生えたのではないかと思う。また政治的な面で考えても、世界でも遅れているという扱いの中国が、アメリカや日本、ロシアなどの国々に追いつこうとする意識が、街中の様子に表れているのではないだろうか。

一方で、日本以上に近代的な文化が浸透している面も見られた。それは、スマホ文化である。中国の街中やショッピングモール、夜市などを歩いていると、ほとんどの中国人がスマートフォンを片手にゲームをしたり、ネットを閲覧したりしていた。特にショッピングモールの店員は、元々仕事中におしゃべりや食事をするのが見られたところが、全てスマホに操作する時間に費やされていた。これは少なくとも10年前には見られなかつた光景だ。日本でも、“ながらスマホ”が社会現象となっている現代だが、中国ではさらに深刻な様子がうかがえた。この研修旅行の一環で出会った東北師範大学の学生と交流した中では、中国では特にSNSなど、自由にダウンロードしたり閲覧したりできないという情報を得た。同じようにテレビなどのメディアでは、国が許可したものしか報道されないため、若者が好むようなバラエティーに長けているものはあまり放送されないのであろう。限られたネットワークを使って趣味や興味のあるものを楽しむという面で、スマホに費やす時間が増えているのではないかと考えた。見知らぬ人でも声をかけ、和気あいあいとした雰囲気が漂っていた中国人らしい姿が、だんだんと薄れていっている気がして少し虚しさを感じた。

また、私が知っている中国と変わらない部分もあった。それは、良い意味で自己主張が激しいことである。たとえば、順番を守らなかったり、会話の時の声が大きかったりすることだ。特に前者は日本人にはほとんど見られない性質であり、そもそも中国人には日本人ほど順番という概念がない。日本人は、自分の気持ちやしたいことを人にはっきり伝えたり、行動に示したりするのに消極的で、ガツガツ前に出て行くことはできない人が多い。中国人は、真反対であるという風に感じる。

さらに、コンビニなどで、私達を韓国人と思い込み、嫌がる中国人にも複数出会った。さらに、私達を日本人と分かった上で、あまりいい顔をしない人もいた。これは、最近の日中韓関係を表しているのかなと感じた。しかし、日本人だと分かってとても喜んでくれ、日本

のことが好きだと言ってくれる人もいた。

日本に旅行で訪れる中国人が多い近年、日本人は中国人に対して良い態度で接しているだろうか。偏見やイメージだけで避けてはいないだろうか。東北師範大学の学生と交流する中でも、中国人が日本のことに対する興味を持ち、知ろうとする姿、日本のことについて褒めてくれる姿を見て、私は自分自身を肯定してもらっているような気持ちになるくらい嬉しかった。その喜びを、日本人はもっと知るべきであると思った。日本人は何に対しても、あまり積極的に行動しない傾向にあるが、もっと知るべきことはたくさんあると思う。グローバル化をうたう現代だが、きちんと海外に目を向けられているだろうか。偏見や固定概念は捨て、ありのままの姿を肌身で感じてからその国に対する気持ちを整理すべきだと思った。

高橋 由衣

中国研修旅行フィールドワーク事後レポート

2019年 9月19日

はじめに

今回私は第二外国語で中国語を履修しているということ、中華圏への留学を視野に入れている、と理由からこの研修旅行に参加しようと思った。そのためにまず中国の歴史や土地を知り、文化や生活を直に感じ、体験する必要があると思った。そして満州國をはじめとする中国の歴史および満州國皇帝愛新覺羅溥儀への理解を深めておかなければならぬと思った。

溥儀が暮らした場所

まず溥儀の青年期をすごした紫禁城について書こうと思う。

紫禁城は北京市にあり、天安門広場を抜けた先にある。入り口には毛沢東主席の記念堂がある。天安門を抜け、牛門を抜けると中には太和殿がある。これは宮廷の重大な式典などを行うために使われたものだ。そして奥に中和殿、科挙の最終試験 殿試を行う際に用いられた保和殿がある。宮殿の前に置かれる獅子像にもそれぞれの意味があり、右にあり、鞠を持っているのが雄であり、左にあり、手に子供の獅子を持っているのが雌の獅子で子孫繁栄の意であるとされている。また西六宮と呼ばれる妃たちの暮らした後宮付近の獅子は伏せており、皇帝を見ないようにしている、とも言われている。また、扉一つ、階段一つにしても皇帝を敬う意が込められており、細やかな工夫が細部にまで施されている。例えば、保和殿の前にある雲龍階石という石段には龍や雲が刻まれており、皇帝を敬う模様であるそうだ。さらに中国では、9という数字は皇帝を意味するため、扉にはそれぞれ9つずつ模様が施されている。また階段は3段に分割されているが全てに9段ずつあり、その3段の3というのも9の約数であるため皇帝を意味すると考えられている。このような装飾がそれぞれの宮殿、後宮にまでも施されており、当時の皇帝に対する敬意を感じた。

次に、長春にある偽滿皇宫博物院だ。偽滿皇宫博物院は愛新覺羅溥儀が旧満州國皇帝であった時に住んでいた皇宮である。そこには溥儀が実際に使用していた部屋や政治を行なっていた宮内府などがそのままあり、かつての妃たちとの生活の写真や話なども記してあった。なんとなく見ていればただの溥儀の妃の写真だが、そこからも色々な歴史や背景を知ることができた。例えば溥儀の妻が何気食べ白米を食べている食事にしても皿一杯に白米を吃ることは当時はたいそうな贅沢で皇帝の妻などの身分でなければ到底かなわなかつた事だという。また、当時溥儀が風呂や断髪の時に使っていたという風呂場には、浴室の横に使者の椅子が置いてあり、風呂ひとつにしても皇帝の生活がうかがえた。偽滿皇宫博物院では事前学習では知ることのできなかつた情報や目にすることのできなかつた資料までも見ることができた。これらは日本においては決して目にすることの出来ないものであったので、今回訪れ知ることができて良かったと感じる。

中国へ行ってみて感じたこと

1つは街並みだ。今回の研修旅行で大連をはじめとするいくつかの都市にいったが都市ごとに変わる町の様々な雰囲気から歴史を感じた。大連には、日本に占領された時代に作られ、そのまま残っているという建物が多く残っていた。かつて（1905年ごろ）大連は満人街とも呼ばれ、数万人が暮らし、約1200万戸もある栄えた町だったという。もうひとつはハルビンだ。伊藤博文が暗殺された街としても知られる街だが、そこは中国的

でもなく、日本的でもなかった。ハルビンはロシア人が建設した町と呼ばれ、建物も雰囲気もロシア的であった。中央大街と呼ばれる通りには外人が多くいる上に店や看板にもロシア語が多くあった。ハルビンはロシアの”凍らない港”を求めてアジア進出から始まる。ロシアからアジアの不凍港までを繋げるための東清鉄道開通の調査の過程で発見され、ロシアの植民地となった。多くのロシア人やユダヤ系の亡命者が入ってくる街であったと言う。そのためか、仏教や道教の多い中国でキリスト教ともおり、東方正教会の聖堂も多く建設されたそうだ。実際ハルビン駅のとても目立つところに聖ソフィア大聖堂が建っており、中国とロシアの歴史を感じた。

そしてもう一つは言語の面だ。中国語は正直、英語よりも簡単だと思っていた。第二外国語として1から始める分長年学んできた英語よりも成長を感じられ、英語よりも学びやすいからだ。しかし現地に行ってみると全く単語が出てこないだけでなく、1文を聞き取ることすらできなかった。会話においてはは謝謝、これいくら、程度しか発することができなかった。現地の人は何度も繰り返して発音してくれるわけでもない上に話すスピードがとても早かった。そのためゆっくり何度も話してもらって初めて習った簡単な文法が聞き取れ、最悪筆談と翻訳機を合わせて使って意思を伝えることがあった。また、中国では英語が通じないことが多いと感じた。食事の際の買い物でもmenuやoneが通じなく、意思疎通がとても難しかった。これまでの中国語知識ではあまりにも足りてないという事、さらに英語も通じないため本当に中国語が使えない現地では生活できない事を身にしみて感じた。この経験は今後中国語を学ぶ上でのモチベーションになった。話せる様にするには今まで以上に中国語をもっと学ばなければいけないと感じた。

旅順で私が感じたこと

19I178 廣田佳子

私はこの研究旅行に参加するまで「旅順」という地名を知らなかった。ましてや、「二〇三高地」という場所さえ初めて聞いたところだった。だが、祖母によると、私の曾祖父が戦争で旅順に行ったことがあるらしい。あまり詳しいことについて聞くことはできなかったが、第二次世界大戦で行ったようなことを言っていた。私はこの機会に、かつて私の曾祖父が行ったであろう旅順について深く学んでみようと思う。

旅順（旅順口区）は中華人民共和国遼寧省大連市の県級行政区であり、東には黄海、西には渤海があり、遼東半島の最南端に位置する。温帯モンスーン気候で四季がはっきりしており、日本と似た気候である。人口は221356人で、国家级風景名勝区、国家级自然保護区に指定されている。

1895年に日清戦争で清が破れ、一度、日本と清で結ばれた下関条約により、旅順を含む遼東半島は日本に割譲されることになろうとしたが、フランス・ドイツ・ソ連からの三国干渉によって中止となる。1904年に始まった日露戦争でロシアに勝利した日本は、ポーツマス条約により旅順や大連、南満洲鉄道の租借権を得た。第二次世界大戦の末期にソ連軍が旅順を占領したが、1955年に中華人民共和国に返還された。

旅順の有名な観光地として、二〇三高地が存在する。「二〇三高地」という名前の由来は、元々、海拔206メートルあったが戦争により3メートル削って海拔203メートルとなったからである。二〇三高地は1904年の日露戦争で日露両軍が争奪し合っていた、旅順西部戦線での主要戦場の一つである。日露両軍はこの高地を争奪するため、激しい戦いをした。だが戦争を進めていくうちにロシア側の財政状況が悪くなり、国民から戦争に反対する動きが高まる。日本も物資が不足し、戦争を続けていくのが困難な状況だった。旧日本軍が1904年9月19日にロシア軍から陣地を奪い取った後、二〇三高地に向かって総攻撃を行い始めたが、11月末まで70回以上攻撃し続け、全て失敗していた。それが66日間続いて12月5日に280ミリメートルの榴弾砲を使用し、ようやくその高地を攻め落とした。結果、ロシア軍側では死傷者は5000名余り、日本側では死傷者は10000名余りとなった。日本軍が二〇三高地を侵略した後、すぐにここ二〇三高地に重砲観測所を設置して、重砲を指揮しながら旅順港に向かって砲撃を開始した。その結果、旅順港にあったロシア軍艦は沈没したとされていたが、陥落後に陸海軍が調査をしたところ、ほとんどの軍艦は命中しても艦底に損害を受けておらず浸水などは起こしていなかったと、1906年11月の最終報告にはそう書かれている。その原因は使用した鉄砲の砲弾自体が古かったのと、動作不良で不発弾も多かったからだそうだ。

戦後は、日本第三軍司令官である乃木希典は戦争で命をなくした次男の乃木保典を記念するために、戦場に落ちていた砲弾の残片で高さ10.3メートルの砲弾状の慰靈塔を建て、「203」の当て字で「爾靈山」という三文字を残した。「爾靈山（にれいさん）」を中国語の発音で読むと「アーリンサン」となり、日本語読みと似ているといわれている。乃木将軍はとても優れた詩人だということは有名であり、多くの漢詩や和歌を残している。

爾靈山險豈難攀
男子功名期克艱
鐵血覆山山形改
萬人齊仰爾靈山

この漢詩「爾靈山」は、二〇三高地での激しい戦いにおいて勇敢に戦った兵士を称え、そして若くして亡くなった兵士を思って詠まれた。詩の意味は、以下の通りである。

二〇三高地が如何に険しくとも、よじ登れないはずはない。男子たるもの名を立てるには、如何なる困難にも打ち克つ覚悟を持たなければならない。その決意で地形が変わるほどの激戦の後、敵陣を制圧した。一方で多くの命が失われてしまった。今静かに仰ぎ祈るのは、まさしく爾（汝）の靈の山。

乃木自身、息子を二〇三高地での戦いで亡くしているからこそ様々な思いが込められているのであろう。この詩は「螺旋」、「金州城」と共に「乃木三絶」の一つに数えられている。



二〇三高地の頂上からは約 4 キロメートル先の旅順港が丸見えで、戦争には有利とされていた。その理由として、旅順港は湾のように入り組んでいるため入り口が狭く、敵が侵入する際、一度に多くの軍艦が攻めてくることは無く、攻撃を受けにくくと思われていたからである。また、台風や津波などの災害時も影響が少ないと考えられていた。実際、当時の陸軍大将だった兒玉源太郎の電話での「そこから旅順港は見えるか？」という問い合わせに対して、二〇三高地の頂上にいた陸軍将校は「見えます。丸見えであります！各艦、一望の元におさめることができます！」と答えたエピソードがある。



1985 年に大連市の市級文物保護単位に認定され、1988 年には遼寧省の省級文物保護単位に認定されている。現在は、旅順國家級森林公園となっており多くの桜が植えられている。二〇三高地一帯が観光地として解放されたのは 1990 年代前半のことで、それまでは中国軍の軍用地として閉鎖していた。二〇三高地にある 2 つの看板の日本語での説明書きの

最後に、「日本の国民を侮辱している。」「この爾靈山は、すでに日本軍国主義による对外侵略の罪の証拠と恥の柱となった。」と載せられていた。このような文章にした意図はわからないが、昔は日本人（外国人）の立ち入りは禁止されていたというのも納得できるような気がした。



この中国研究旅行に参加したことで、私にとって満洲についてより詳しく学ぶことができる良い機会となった。教科書通りの知識と、実際に跡地や関連が深かった場所を巡り、ガイドさんや現地の人の話を聞いて自分自身が感じることはかなり違うと思う。私自身、人生で満洲国があった歴史のある場所に行くことなんて考えたこともなく、個人旅行で行くのは大変そうだなとしか思っていなかった。本場の中華料理を食べるのに苦戦したことや、道路を渡るタイミングが難しかったことも今となっては良い思い出だ。

【参考文献】

旅順口区_百度百科（最終閲覧日 2019/10/14）

<https://baike.baidu.com/item/%E6%97%85%E9%A1%BA%E5%8F%A3%E5%8C%BA/7260459?fromtitle=%E6%97%85%E9%A1%BA&fromid=547476>

旅順 旧高崎山 - あの名セリフが生まれた場所 2015/8/14 更新（最終閲覧日 2019/10/14）

<https://blog.goo.ne.jp/hmb09/e/8b652cfe99f7dc01d7962668e8b6c70b>

日露戦争 | クリップ | NHK for School（最終閲覧日 2019/10/14）

http://www2.nhk.or.jp/school/movie/clip.cgi?das_id=D0005403078_00000&p=box

爾靈山 - 公益社団法人 関西吟詩文化協会（最終閲覧 2019/10/14）

http://www.kangin.or.jp/learning/text/japanese/k_A2_058.html

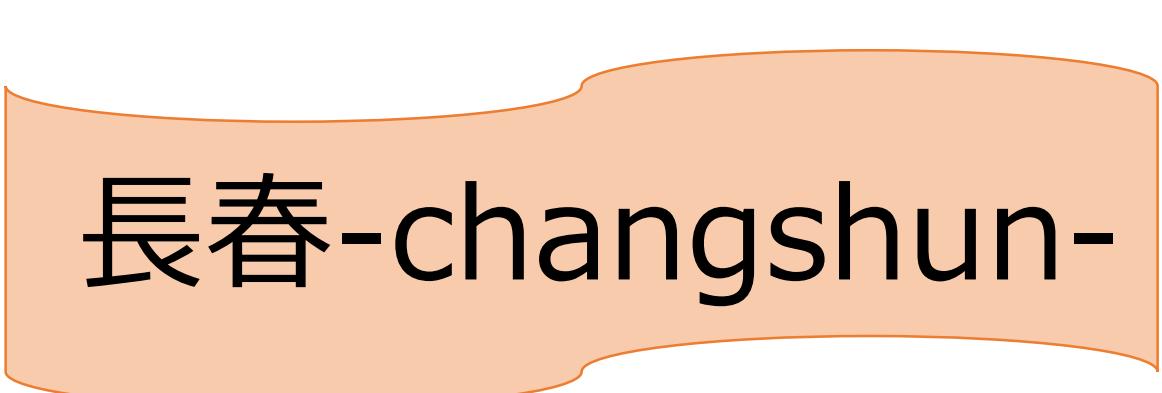
詩牌（乃木三絶）（最終閲覧 2019/10/15）

<http://nogi-jinja.jp/web/page=56/page=79/>

大連-dalian-



長春-changshun-



ハルビン-haerbin-



北京-beijing-



北京-beijing-



おわりに

4月の懇親会の時に佐藤先生と李先生に引率を依頼された時、私に引率が務まるのだろうかととても不安な気持ちでいっぱいでした。また、旅先が中国の場合、例年、欧米への研究旅行と比べると参加者が少ないため、学生が集まるのかという不安もありました。一方で、私は大学時代に夏休み中、1ヶ月ほど北京に語学留学していたこともあり、今度は自分が引率側として中国に行くということに対し、考え深いなと思うと同時にこうして仕事で再び中国に行けるという喜びもありました。

実際に研究旅行の準備が始まるとき、参加者人数が少ないので、なかなか研究旅行の実施が確定されず、準備期間が狭まり、研究旅行の実施が確定した頃には短期間で手続き等の準備をしなければいけなくなりました。そこで、今までの研究旅行に行った助手の覚書を参考にし、また、昨年度引率助手だった加瀬と一昨年引率助手だった小倉からの協力もあり、短い準備期間の中であるのにも関わらず、無事準備を終えることができました。

現地に着いてからは、学生の行動力、学習意欲の高さに日々驚きました。自由行動の時に学生だけで地図を見ながらショッピングセンターや温泉に行ったりしていたからです。私もその姿に感化され、参加学生と一緒に行動し、学生と苦戦しながらも中国語を使ってお買い物を楽しみました。

参加学生は限られた時間の中でより多く情報を吸収しようとしており、一言も聞き逃さないとガイドさんの話を真剣に聞いたり、質問をしたり、展示品に見入っている姿がとても印象的でした。また、研究旅行中に誕生日を迎える学生がおり、大連から高速鉄道で長春へ移動した日の夜ご飯は、みんなでサプライズバースデーケーキを食べました。その日は鉄道での移動だったため、大変でしたが、学生が楽しそうにしている姿を見たら疲れがなくなりました。

東北師範大学の学生との交流会の日では、学生が実際に住んでいる学生寮や教室を見学したりしました。大学時代に私も学生寮で生活していたため、なんだか懐かしい気持ちになりました。また、昼食は東北師範大学の学生と共に女子大学の学生の全員で食べました。大きな回転テーブルにはたくさんの料理があり、両大学生が交互に座り、現地の学生と交流をすることによって、授業では学べない、本当の中国を肌で感じることができたのではないかと思います。参加学生は、同年代の中国人の学生と連絡先を交換したり、写真を撮ったりしており、とても素晴らしい時間を過ごしたことだと思います。私は学生ではありませんが、学生たちと一緒に昼食を食べました。現地の学生とご飯を食べることは、なかなか経験できないことなので、私の人生の中でとても貴重な体験でした。



東北師範大学生との交流会

10泊11日は長いようで短いなと思いました。募集段階では、参加学生の中に「知っている人が誰もいない」、「周りの人たちと上手くやっていけるか不安」という声が多くありました。私自身、学生をまとめることができるのが不安でした。ですが、研究旅行が始まるとき、参加学生たちは、自分から他の学生に話しかけたりして、行動力がある学生が多く、あつという間に参加学生全員が仲良くなりました。李先生によると、例年、現地の料理が体に合わなく、体調を崩してしまう学生がいるとのことでしたが、特に体調を崩す学生もおらず、何かトラブルがあってもみんなで協力をするなどして、最後まで問題なく楽しい研究旅行になったと思います。最終日には、「もっと中国にいたい」と言う学生もいたほどです。このメンバーで中国に行けたのは、何かの縁だと思うので、この研究旅行が参加学生の皆さんにとって、心に残る良い経験になれば幸いです。私自身、この研究旅行に参加して、責任感やまとめることの大変さを学びました。研究旅行が大成功に終わったのは、李先生をはじめ、学部長の佐藤先生、学部長秘書の長谷さん、JTBの奈良様、現地ガイドの方、参加学生、渡航前に色々アドバイスをしてくれた助手の加瀬さんや小倉さんのおかげです。ありがとうございました。

国際学部助手 小林弥生 記